

(西暦) 2020年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

床上排泄高齢者の排便援助の実態及び継続可能な排便習慣の判断に至る関連要因—在宅で計画的に浣腸や摘便を実施している事例と実施していない事例との比較—

学位の種類： 修士 ( 看護学 )

東京都立大学大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 19894705

氏名： 瀧井 望

(指導教員名： 岡本 有子 )

近年浣腸や摘便の有害事象が報告され、定時的な実施は問題視されてきたが、在宅において床上排泄高齢者に対するグリセリン浣腸（以下、浣腸）や摘便の実施は多い。床上排泄高齢者にとってより健康的な排便習慣をめざした看護援助方法を検討する必要があると考える。

本研究の目的は以下の二つとする。一つ目に床上で排泄をする要介護高齢者の排便習慣における事例の特徴と現在の排便習慣における排便援助と排便状況の実態を明らかにすることである。二つ目に継続可能な排便習慣の判断に至る関連要因を明らかにすることである。本研究では、在宅で継続可能な排便習慣として、定期的な浣腸や摘便を計画し、訪問看護師が実施している事例（以下、実施群）と、定期的な浣腸や摘便を計画していない事例（以下、非実施群）を比較した。

実施群と非実施群を1事例ずつ抽出できる東京都内の訪問看護事業所に調査協力を依頼し、自記式質問紙調査票を郵送した。調査項目は床上排泄高齢者の排便習慣における事例の特徴と現在の排便習慣における排便援助と排便状況の実態等であり、回答は訪問看護経験1年以上の訪問看護師に依頼した。分析は記述統計やFisherの正確確率検定を行った。継続可能な排便習慣の判断に至る関連要因の探索にはロジスティック回帰分析（強制投入法）を実施した。本研究は2020年度東京都立大学荒川キャンパス研究倫理委員会の承認を受けて実施した（承認番号20026）。

主な結果は以下の通りである。

1. 一般社団法人東京都訪問看護ステーション協会に登録している541事業所と厚生労働省の介護事業所・生活関連情報検索システムより、すでに電話依頼をした事業所を除き無作為に抽出した73事業所に電話依頼を614件行い、298か所に郵送した。回収件数は267件（回収率48%）であり、そのうち有効回答243件（有効回答率41%）を分析対象とした。
2. 床上で排泄をする要介護高齢者の排便習慣に関連する事例の特徴は、多くが便秘の原因となる加齢に伴う身体的機能障害や疾患を抱えており、要介護4以上が216名（90.8%）を占め、便秘に影響する併存疾患は、認知症が117名（48.5%）、脳血管疾患は80名（33.2%）、糖尿病は45名（18.7%）、パーキンソン病が30名（12.4%）であった。さらに腹圧をかけることができないが127名（55.9%）を占め、便秘の種類は大腸の蠕動運動の低下により起こる弛緩性便秘が143名（59.3%）と最も多かった。口腔の問題83名（35.0%）や、皮膚トラブル70名（28.8%）が生じていた。
3. 現在の排便習慣における排便援助と排便状況の実態について、実施群は129名（53.1%）、

非実施群は114名(46.9%)であった。訪問看護師は実施群において、訪問の時間内に確実に便を出すことを目的に訪問前日に刺激性下剤を内服させ(実施群 vs. 非実施群、p値: 16.5% vs. 0%、 $p < .001$ )、浣腸と摘便を両方実施し(実施群のうち63.6%)、腹部マッサージを併用し(実施群 vs. 非実施群: 82.9% vs. 43.9%、 $p < .001$ )、便を多量に押し出していた。便秘や排便援助に伴う症状は非実施群に比べ多く発生(63.6% vs. 48.7%、 $p = 0.27$ )していた。

4. 計画的な浣腸や摘便を実施する排便習慣の判断に至る関連要因について多変量解析の結果、認知症がないこと(オッズ比: 95%信頼区間; 0.536 : 0.288-0.996)、口腔問題が生じていること(2.064 : 1.065-3.998)、直腸性便秘があること(3.762 : 1.993-7.101)が抽出された。

以上のことから、直腸性便秘がなく、口腔に問題がなく、便失禁時に対応ができる介護体制を整えられる場合は、床上排泄高齢者であっても、自然排便を目指せる可能性が示唆された。